

郷土のウスバカゲロウ相 とアリジゴク

相坂耕作

ありじごくが成長し、羽化してウスバカゲロウになるということは多くの人に知られています。しかし、ありじごくの生活については余り知られていないようです。私は最近幼虫を飼育し、いろいろな面白いことを確認しましたので一報告します。郷土に産するウスバカゲロウは、私の採集したものが次の4種あります。

ウスバカゲロウ	1964-8-1	姫路市山田町
"	1967-8-13	雪彦山
"	1976-8-21	姫路市広峰山
コウスバカゲロウ	1967-8-13	雪彦山
ホシウスバカゲロウ	1967-9-13	鷓鴣山
"	1976-8-22	宍粟郡一宮町福知
コマダラウスバカゲロウ	1968-8-4	姫路市山田町

日本には、約13種のウスバカゲロウが知られていますが幼虫は5~6種しか知られていません。この幼虫であるありじごくの生活様式は大きく2つに分けられます。

その一つは、大木の下や緑の下などの砂地にすり鉢状(噴火口状)の凹みを作って作っているもの(前述のウスバカゲロウ、コウスバカゲロウ、ホシウスバカゲロウ)であり、他の一つは穴を作らず、岩の表面や樹皮などの凹所に住むもの(前述のコマダラウスバカゲロウ)です。普通にありじごくとして親しまれているものは、すり鉢状の凹みを作って住んでいる方です。

このすり鉢状の凹みに小昆虫が落ちこんだとき、はい上ろうとして、すり鉢の砂粒を落とす。この落ちた砂粒がありじごくの特殊な感覚毛を刺激し、ありじごくは瞬間的に獲物にとびかかり、大あごで虫をはさむ。

この大あごの先は獲物の体液を吸えるようになっており、同時に麻酔薬を注射出来るようになって

ている。ありじごくにはさまれた小昆虫は、あっという間に獲物になってしまいます。ありじごくは獲物が少ないと成虫になるまで3年もかかるといわれています。

ありじごくには肛門がありません。一片の老廃物も排出せず食べるばかりのありじごくは成虫になって初めてふんを出します。幼虫の期間にたまった宿便塊を出すのです。

参考文献 原色昆虫大図鑑(北隆館)
昆虫たちの世界(誠文堂新光社)
虫と遊ぶ(梅谷敏二著、家の光協会)
(S.05 姫路市)

《食草》②-エノキ

家永善文

日本の国蝶であるオオムラサキの食草として知られ、また、ゴマダラチョウ、テングチョウの食草でもある。この木は全国的に分布している落葉樹で、高さ20m、直径1mにもなる。山林中に自生しているが、むしろ神社や仏閣の境内に植えられたり、道ばたに植えられたりしているのがよく目につく。「徒然草」(第45段)にある「えのきの僧正~堀池の僧正」という話はよく知られているが、このえのきはエノキの大きさや生育場所をよく表していると言えよう。

姫路市内にも、あちらこちらの神社境内に大樹が残されており、市の保存樹として指定されているものも多い。中でも市内御着先祖橋側のエノキは枝ぶりも堂々とした立派なものである。書写山や高砂市曾根町にコバノチョウセンエノキという珍木がある。エノキ同様に食草となるだろう。

エノキの漢字にふつう榎の字を使う。これは暑い夏に木陰を与えてくれる木という意味で、エノキの木陰で遊ぶ子供、その木を求めて飛翔するオオムラサキを想うと頼もしい限りである。エノキによく似た木にムクノキがある。生育地もよく似ているがエノキの葉は縁が半分より先にきょ歯がある。ムクノキは縁全体にきょ歯があり、粗い毛が生えているので葉面はざらざらしている。物を磨くのに使われるほどである。果実が熟するとエノキは橙色になり、ムクノキは黒くなる点などの違いがある。果実は共に食べられる。

(S.13 姫路市)